

研究課題

自分の考えを表現し、認め合い、高め合う子の育成

副題

～電子黒板で子どもたちのプレゼン力を高める授業の創造～

学校名	横浜市立高田小学校
所在地	〒223-0068 神奈川県横浜市港北区高田町1774
学級数	14
児童・生徒数	502名
職員数／会員数	31名
学校長	松井 佳奈子
研究代表者	松井 佳奈子



1. はじめに

本校は、1874年「高田学舎」として興禅寺の一室にて創立、開校したという、長い歴史を有する学校である。横浜市ではあるが、周りには田園風景が残っており、前述の興禅寺や天満宮といった歴史を感じさせる建造物が身近にあるという生活環境の中に位置する。

児童は、純朴で素直で、落ち着いて学校生活を送っている。しかし、語彙力に欠け、自分の思いや考えを話したり書いたりすることに苦手意識をもっている子が多い。そこで、ここ数年来「自らの考えを表現し、認め合い、高め合う子の育成」を研究主題として、校内研究を行ってきた。平成22年度は、言語活動の中心を担う国語科を中心として、副主題を『話すこと・聞くこと』の交流を通して」と設定し、取り組んできた。辞書引きや言葉集め等で自分が使える言葉の量を増やしたり、より適切な方法によって相手に伝える実の場を設定したりして、それぞれの考えを交流し合って考えを深めたり、広げたりできるような授業のあり方を探ってきた。

さらに、本教育助成を受けることができ、「電子黒板で子どもたちのプレゼン力を高める指導法の研究」を推進してきた。ここでは、「話すこと・聞くこと」における言語活動をプレゼンテーションに絞った。国語科と生活科や総合的な学習の時間と関連化させた学習を設定することで、子どもたちが、調べてまとめたことを、従来からある単に原稿に書いてあるものを読み上げるというプレゼンテーションから、思いや意図をもって資料を活用しながら行うプレゼンテーションへと、変えることができるのではないかと考えたからである。

成果としては、児童には各学年に応じた聴型・話型が少し

ずつ定着してきている。また、電子黒板や大型テレビに映し出した資料を活用しながら、提案したり主張したりすることも上達した姿が見られるようになってきた。けれども、習得しつつある型を土台とし、それを活用する力については、一年間ですぐに結果が出るということではなく、まだ課題は残っている。

2. 研究の目的

電子黒板活用効果研究協議会において、普通教室での電子黒板の活用による学習効果検証や、授業での典型的な活用パターン(活用モデル)が定義された。その研究成果では、コンピュータやインターネットなどのICTを活用して、分かりやすい授業を支える電子黒板の有効性が検証されている。教科学習での理解度アップはもちろん、調べ学習での成果発表、他校や地域と結んだ遠隔共同学習などさまざまな場面で指導の在り方を変える可能性を示唆している。

そこで、本年度は、電子黒板や大型テレビ・OHCを、主に児童が調べたことや思考したことを発表する際のツールとして活用する授業デザインを研究していきたいと考えた。

また、本校は、いわゆる教職歴の長い教師と浅い教師の2層構造が起こっている。教職歴の長い教師は、どちらかというとICTに否定的な意見をもっている者が多く、浅い教師は、教授型の授業形態から抜け出ることができない者が多い。互いのよさを発揮しながら、研究の質を高め、2層構造間にある壁を少しでも解消していくことができればと考えた。

3. 研究の方法

プレゼンテーション力（以下「プレゼン力」と省略）は、「自分の考えを相手に納得させるために、証拠を示しながら分かりやすく主張する力」ととらえる。プレゼン力をつけるために、プレゼン力を構成する力を精選し、各学年に応じて身につけるべき内容として想定し、系統性を配慮しながら大単元構成を考えていく。

4. 研究の内容

4-1 プレゼン力を構成する力の分析と系統性

本校において、プレゼン力を構成する力として、以下のようにとらえている。

- ①課題設定力（相手意識や目的意識をもって、課題を設定したり課題を修正したりする力）
- ②取材力（インタビュー・調査・資料収集・聞く力・メモする力）
- ③構成力（伝えるための論理・順序・資料取捨選択・自己の考えを練り上げる力）
- ④表現力（話す・書く・描く・撮って表す・話すために書く・メディア活用表現・紙面構成力・資料活用力）
- ⑤協働学習力（多様なコミュニケーション力・相手の思いを読み取り自己の考えを伝える力・話し合い・振り返り修正力）

これらについて、各学年において具体的にどのような指導内容が考えられるかを分析し、さらに系統性を配慮しながら単元構成を考えていく。

単元を構成する方針として、基礎的な力を身につけるための単元は、国語科のカリキュラムの中に位置づけ、特に意識して指導する単元を明確にする。それを、生活科・総合的な学習の時間と関連させ、大単元構成を考える。

4-2 電子黒板や大型テレビ・OHCの効果的な活用

国語、総合的な学習の時間において、教科書・ノート・プリント・立体物・スライドなど、相手を説得するための資料を提示するツールとして、子どもたちに活用させていく。電子黒板活用効果研究協議会における活用パターンを参考にする。

4-3 研究の方法のワークショップ型研究会

教職歴の長い教師と浅い教師の二層構造の解消を図るために、誰もが自分の考えを発言する機会を保障する参加型の研究会方式のワークショップを行う。

5. 研究の経過

5-1 各学年による取組

＜低学年の実践例＞ 第1学年「たのしい なつやすみ」（6時間扱い）

国語科においては、どのように話せば友達に分かりやすく伝えられるのか、話し方・聞き方の具体的な約束を話し合っで決めた。誰もが、進んで伝え、大事なことを落とさずに聞いて友達の伝えたいことを分かろうとする学習形態として、「4人のグループ」「全員が必ず感想や質問をする」という場面を設定した。グループにしたことにより、みんなの前で話すことの抵抗が薄れ、話す楽しさや認められる喜びを味わうことができた。また、発表の前には、話の内容が良く分かるように、みんなに知らせることを順序よく話せるように色別カードに書いた。さらに話が具体的に分かるように、おはなし会で使用する資料を大型テレビに提示してみせた。情報が耳からと目からの両方から得られたことにより、話を楽しく聞くことができた。

この学年では国語の学習と生活科と関連させた。夏休みに入る前に、夏休みの楽しい過ごし方をみんなで話し合ったり、一番の思い出を9月に発表することを知らせ、1枚だけの写真や1つの実物をもってきてよいことを話しておいたりすることで、課題設定、取材力が発揮されていたと考える。



大型テレビの前でみんなの方をみて発表

＜第1学年＞

	6月	7月	8月	9月
国語	「みんなに しらせたいな」 ○文の構成「順序よく」			
1)課題設定力				
2)取材力				
3)構成力		○		
4)表現力		◎		
5)協働学習力				
総合	「たのしい なつやすみ」			
1)課題設定力		○		
2)取材力		◎		
3)構成力				
4)表現力				
5)協働学習力		○		

＜中学年の実践例＞ 第4学年「人間の力のすごさについて考えよう」（12時間扱い）

基礎的な力を身につけるための単元は、国語科「『かむ』ことの力」という説明的な文章の学習を配置した。ここでは、人間の力の1つである「かむ」という行為について、そのすごさを文章から読み取った。



資料に印をつけながら、発表

また、「初め、中、終わり」という文章構成を学習した。

それを活用して、総合的な学習の時間において、様々な人間のすごい力を調べてまとめて発表した。そこでは、発表する相手や目的を明確にして自分で課題を見つけたり、図書資料やインターネットなどを活用して取材したり、国語科で学習した「初め、中、終わり」の文章構成を生かして発表原稿をまとめたりした。また、総合的な学習の時間では、同じ課題意識をもつもの同士で原稿を交換したり練習を一緒にしてアドバイスをしあったりという学習形態をとった。また、資料は調べたことの中で一番知らせたいと思うことが伝わる絵を1枚だけ作ってよいことにした。



資料のポイントを拡大しながら、発表

1枚の資料を大きく電子黒板に映し出すことで、大事なポイントに印をつけたり拡大したりしながら話したり、友だちの伝えたいことをしっかりと聞き取ろうとする様子が見られました。

<第4学年>

	4月	5月	6月	7月
国語	「かむ」ことへの力 文の構成「はじめ・中・終わり」			
1)課題設定力				
2)取材力				
3)構成力		○		
4)表現力				
5)協働学習力				
総合	「人間の力のすごさを発表しよう」1枚プレゼン			
1)課題設定力		○		
2)取材力		○		
3)構成力		○		
4)表現力		○		
5)協働学習力		○		

<高学年の実践例> 第6学年「パネルディスカッションを開こう」(10時間扱い)

意欲的にパネルディスカッションに参加しながら自分の立場を明確にして、考えや思い、根拠や理由をもとに話したり、話し手の意図をつかみながら聞いたりすることをねらいとして、本単元を実施した。プレゼンテーションソフトを用いた発表をすることで、資料を作る段階で全体の流れを考える必要性が生まれる。そうすることで、自分の立場を明確にすることができた。また、ソフト内に



フロアの子どもの様子

ある様々な機能を用いることで、フロアの児童に効果的に自分の思いを伝えることができた。準備の時間は、年度の初めから少しずつソフトに触れる機会を設けることで解決できる。一方で、資料を準備する時間がかかるという点、臨機応変に提示する資料を使うことができないという点で課題が残った。



根拠を主張するための資料

そのためにも、年間指導計画をしっかりと立てる必要がある。

また、本単元は、総合的な学習の時間だけでなく、社会科とも関連化させ、課題設定や取材、表現力の育成を図った。

<第6学年>

	12月	1月	2月	3月
国語	「平和のとりでを築く」 ○具体例と筆者の意図 ○パネルの体験			
1)課題設定力				
2)取材力				
3)構成力		○		
4)表現力		◎		
5)協働学習力				
総合	「パネルディスカッションを開こう」 ○プレゼンソフト			
1)課題設定力		○		
2)取材力		◎		
3)構成力				
4)表現力				
5)協働学習力		◎		

5-2 ワークショップ型の研究会の開催



校内拡大研究会での外部講師の
実践発表



実践を改善するための
ワークショップ

校内研修の検討会は、毎回ワークショップを取り入れて行った。また、夏休みには当助成金を活用し、全国のICT活用を推進する研究者・実践者をお迎えして「拡大校内研修会」を実施させていただいた。校内外より50名近い方々のご参加をいただき、熱い議論が交わされた。それまであまりICT活用に積極的でなかった先生方からも「こんなふうに使えるのね」「ちゃんと効果を考えてやれば、ICTも使えるわね」というお話を聞くことができた。

6. 研究の成果と今後の課題

○成果

教職歴の浅い教師が、子どもたちの発表の場などで積極的に電子黒板（含む：大型デジタルテレビ）を活用する授業を行うようになり、その効果や活用場面について、学校全体で検討することができた。特に、本教育助成により実施した「拡大校内研究会」が、教師のやる気につながった。また、子どもたちは、考えを発表し、交流する場が増えたことにより、分かりやすく伝え合おうと工夫する姿が見られるようになってきた。

○課題

電子黒板（含む：大型デジタルテレビ）で拡大提示するだけでなく、共通点や相違点に気づき、思考するような活用場面を設定していく。

そこで、23年度は、子どもたちにつけたい力を研究課題に明確に打ち出し、その力を育成するための一つの手段としての電子黒板（含む：大型デジタルテレビ）の活用を位置づけたい。それにより、めざす子ども像をイメージして、授業デザインを行うことができると考えている。

7. おわりに

「電子黒板で子どもたちのプレゼン力を高める指導法の研究」という研究テーマのもと、熟達者と新参者が互いに知恵を出し合って、デジタルとアナログがうまく融合する授業デザインを工夫し、授業力の向上をめざした研究を推進してきた。当教育助成を受けたことにより、その研究が何歩も前進することができた。ここに、感謝の意を表したいと思います。

来年度は、「ヨコハマパイオニアスクール」となるため、今年度の研究を継続し、課題解決をめざしていきたいと考えている。

参考文献

- 電子黒板が創る学びの未来—新学習指導要領 習得・活用・探究型学習に役立つ事例50（中川一史・中橋 雄著／ぎょうせい／2009、3）
- 授業力をグリーンとUPさせるデジタルコンテンツ活用法55（中川一史・前田康裕著／明治図書／2007、8）
- 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会審議報告書
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06021401/all.pdf